江戸・明治期の縞帳の比較研究（第1報）

――羽島市歴史民俗資料館所蔵の縞帳について――

山本麻美・河村瑞江

A Comparative Study of the Shima-cho of the Edo and Meiji Era (Ⅰ)

— Regarding the Shima-cho of the Hashima City Folk Museum —

Mami YAMAMOTO and Mizue KAWAMURA

緒　　言

縞帳は縞の見本帳という文化的な面のみでなく、当時の生活と社会の動きとの関連をも現在に伝える貴重な民俗資料だと考えている．それは縞帳に数多く貼付されている木綿という素材が一般に普及した江戸から，産業化により自家用木綿縞が織られなくなる明治にかけての手織木綿縞裂を調査分析することにより，染めや織りに関わる技術，歴史，民俗，産業，デザインなどの多くの情報を引き出すことができるからである．

今回の調査では，これまで進めてきた岐阜県加茂郡東白川村越原などの縞帳調査の結果をふまえ[1～3]，岐阜県にある羽島市歴史民俗資料館所蔵の縞帳を調査分析し，江戸から明治時代にかけての手織木綿縞の密度やデザインなどの特徴についての比較研究の一端とした．本稿では当資料館所蔵の縞帳10冊についての調査結果及びその中の資料館収蔵番号7058の縞帳に貼付されている裂の分析結果について報告する．

方　　法

1．羽島市歴史民俗資料館所蔵の縞帳10冊の調査を行なった．調査項目は，縞帳の大きさ，ページ数，裂数，反古に見られる墨書のメモ，貼付裂の特徴，その他とし，調査内容を縞帳毎に民俗文化財調査記録用紙に記録した．

2．上記10冊の縞帳の中から，江戸から明治にかけて制作されたと思われる資料館収蔵番号7057と7058の2冊の縞帳を抽出し，この2冊の縞帳に貼付されているすべての縞裂に対し各1枚ずつの民俗資料記録カードを作成し，調査内容を記録した．調査項目は密度，縞割（糸の配列と本数），縞の構成（縞・格子，対称・非対称），配色数，組織（平織・その他），素材，その他・特徴等とした．

3．密度調査にはルーペを使用し1cm^{2}内の経糸，緯糸本数をそれぞれ測定した．なお，対象が手織り，手紡ぎの裂であることから場所により粗密の差が見られるため，可能な限り2～3箇所で測定し，その平均値を記録することとした．

4．色については，藍染めによる青系3段階（紺，青，浅葱）と茶，白，黄，緑，赤，紫，モノトーン（白を除く灰～黒）の8グループ10色の色名で分類した．なお，縞割，色数の調査に際しては，濃淡についても別色として「濃」「淡」などの印を付けて記録した．

5．それぞれの縞帳の数ページについて，ルーペを用いて使用されている糸の撚りの方向を調べた．
6．調査内容を集計し，岐阜県加茂郡東白川村越原などの縞帳調査の結果と比較しながら制作年代等について考察した．

結果及び考察

1．羽島市歴史民俗資料館所蔵の縞帳調査について

岐阜県の羽島市歴史民俗資料館は，笠松という古くは美濃木綿から近代の銘仙，毛織物に至る織物の産地に所在するため，手織機の他，染織に関する小道具などの資料を多数収蔵，展示している．その収蔵品の中に竹鼻町の機屋から寄贈されたという縞帳10冊が含まれている（通称「一柳コレクション」）．これらはすでに収蔵品として整理され収蔵番号も付けられていたが，内容については未調査の段階であった．そこでまず，10冊すべての縞帳の大きさ，ページ数，貼付裂数，墨書，その他の特徴などの項目について調査し，民俗文化財調査記録用紙への記録を行なった．各縞帳の概要は次の通りである．

①資料館収蔵番号7053
大きさ：縦300mm×横220mm
体裁：洋紙（印刷物，明治42年の「官報」）の右側を和綴
ページ数：56ページ＋表紙
その内，裂が貼付されているのはp. 21～26の計6ページ
裂数：299裂
表紙書付：表題「縞柄見本帳」
裏表紙：年号「大正元年」「明治四拾五年○○」（○は不明）
所有者「岩田平次郎」「岩田輝幸」
特徴：制作年代が新しく，平織以外の織り組織を用いた裂や茶，赤，グレーなど青系以外の色を主体とした新しい裂が貼付されている．
時代：明治後期～大正

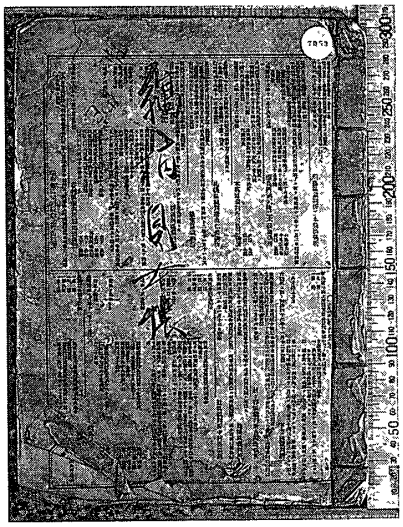

図1　収蔵番号7053の表紙

②資料館収蔵番号7054
大きさ：縦145mm×横222mm
体裁：和紙の右側を和綴
ページ数：68ページ＋表紙
その内，裂が貼付されているのはp. 1～29の計29ページ
裂数：276裂
表紙書付：なし
特徴：落書きのない白い和紙を使用している．墨書はp. 40の「廣島縣備后國蘆田郡」（抹消線あり）

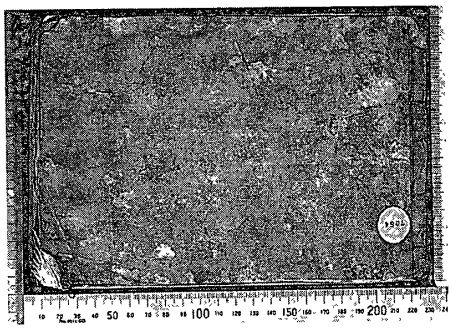

図2　収蔵番号7054の表紙

と p. 44 の「木綿張附帖」のみ．p. 58 ～ 68 には，刺し見本 ？（色糸で線画）のようなものがある．藍の色が濃く，木綿のみの裂が少ない（約 15 %程度）．細い糸と手紡糸風の糸が混在している．

時代：明治中期

③資料館収蔵番号 7055

大きさ：縦 135mm×横 180mm

体裁：和紙（青色の罫線あり）の右側を和綴

ページ数：43 ページ＋表紙

その内，裂が貼付されているのは p. 1 ～ 18 と p. 21 ～ 37 の計 35 ページ

裂数：282 裂

表紙書付：なし

特徴：反古に墨書が多く残されている．内容は履歴書，山林原野の件，薬品開業に関するものなどである．地名では「兵庫県」「朝来郡野間村」など，また年号では「明治元年」「明治 9 年」「明治 15 年」などの表記が見られる．藍の色は濃く，鮮やかな紫色の使用，非対称のデザインが多いなど明治期の木綿縞の特徴が現れている裂が多い．

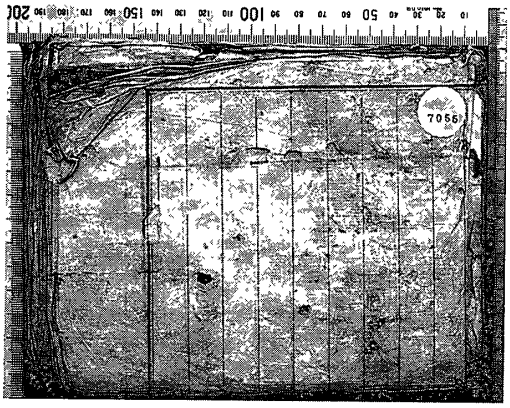

図 3　収蔵番号 7055 の表紙

時代：明治中期以降

④資料館収蔵番号 7056

大きさ：縦 181mm×横 148mm

体裁：和紙の右側を和綴

ページ数：22 ページ＋表紙

その内，裂が貼付されているのは p. 10 ～ 21 の計 12 ページ

裂数：118 裂

表紙書付：■■■㊐（■は墨で塗りつぶしてある）

特徴：反古紙の墨書に「石」「斗」「合」「升」の単位が使用されている．p. 12 内側に「㊥佐○屋」（○は不明）の印が残されている．藍の色が濃く，青系，茶，白，灰以外の色がほとんど使用されておらず，全体的に地味である．各裂は四隅を切り落とした形になっている．

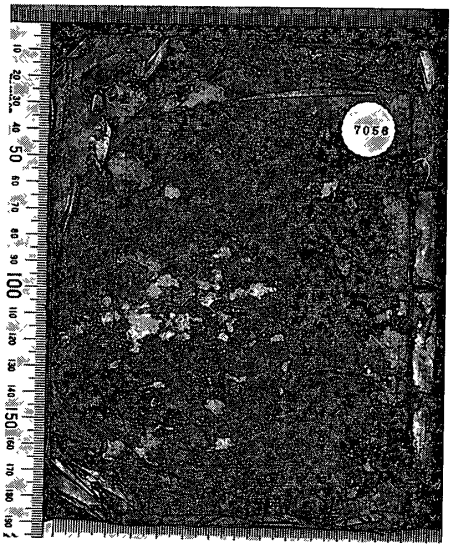

図 4　収蔵番号 7056 の表紙

時代：江戸～明治

⑤資料館収蔵番号 7057

大きさ：縦 220mm×横 158mm

体裁：和紙の上部を和綴

ページ数：25 ページ＋表紙

その内，裂が貼付されているのは p. 7 ～ 25 の計 19 ページ

裂数：359 裂

表紙書付：「石田万治様」「井筒屋九八郎」

特徴：反古にいろいろな墨書が残されている．p. 22 と p. 23 の間には「呉服お○通」（○は不明）という表記が見られることから，井筒屋のお通い帳が台紙に使用されていることがわかる．年号では「明治 13 年」「明治 14 年」「明治 15 年」などが書き残されている．糸の撚りの方向を一部の裂について調べたところ，前半ページにいくに従い Z 撚りの糸が増えていたことから，最後のページから表紙の方へ向かって裂を貼付していった様子がわかる．

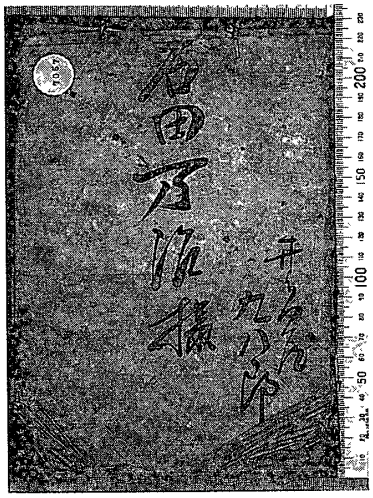

図 5　収蔵番号 7057 の表紙

時代：明治中期以降

⑥資料館収蔵番号 7058

＊後述

⑦資料館収蔵番号 7059

大きさ：縦 175mm×横 222mm

体裁：和紙の上部 2 個所を綿糸で綴じている．

ページ数：26 ページ＋表紙

その内，裂が貼付されているのは計 10 ページ

裂数：306 裂

表紙書付：書付はないが，「岐阜県美濃蚕種同業組合証」の朱印が押されている

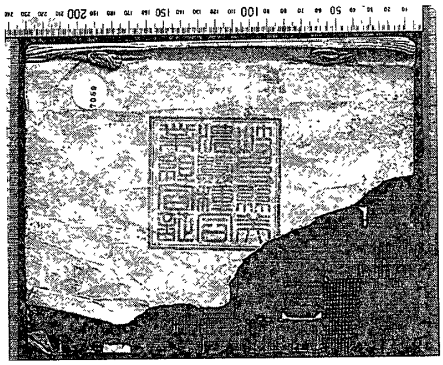

図 6　収蔵番号 7059 の表紙

特徴：ページはすべて，大正 9 年か大正 6 年の合格証印が押されている蚕種を貼り付けていた台紙を使用している．内側には蚕種が貼られていた「一」から「廿八」の番号がふられたマスが残っている．そのマスの右側には「住所氏名岐阜縣加茂郡東白川村越原○桂川政太郎，製造場所仝縣仝郡仝村○村○○○」（○は不明）の印刷があり，当時の蚕種を作っていた地域がわかる面白い資料である．蚕種関係以外には，p. 3 に「繊維十ヒロニ十七デアル」，p. 15 に「白，シマ三十，コン十八，十五」という鉛筆での織物の縞割などに関するメモ書きがある．貼付の裂については，木綿以外の光沢のある素材の使用，平織以外の織り組織の使用，鮮やかな色糸の使用などの新しい裂の特徴が見られる．

時代：大正

⑧資料館収蔵番号 7060

大きさ：縦 135mm×横 385mm

体裁：和紙の右側をこよりで綴じている．

ページ数：27ページ＋表紙
裂数：311裂
表紙書付：なし
特徴：反古にいろいろな墨書が残されている．「金銭出入帳」の墨書やガス糸代などの品名，日付の表記が見られる．年号には「明治4十年度」がある．貼付の裂については，平織以外の織り組織の使用，藍以外の染色，鮮やかな色糸の使用などの新しい裂の特徴が見られる．また，絣のみ，唐桟風の裂のみが貼付してあるページがあるため，ある程度分類しながら貼付していった様子を窺い知ることができる．なお，収蔵番号7062と体裁，反古に見られる文字が同一であり，貼付されている裂の中にも全く同じ柄のものがいくつも見られるため，収蔵番号7062と同時期に作られたものであると推測できる．
時代：明治後期

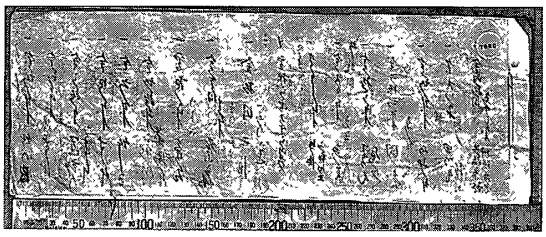
図7　収蔵番号7060の表紙

⑨資料館収蔵番号7061
大きさ：縦124mm×横315mm
体裁：和紙の右側をこよりで綴じている．
ページ数：20ページ＋表紙
この内，裂が貼付されているのはp. 4～20の計17ページ
裂数：423裂
表紙書付：なし
特徴：反古に町名，氏名などのいろいろな墨書が残されている．収蔵番号7060，収蔵番号7062と体裁は同じであるが，反古に見られる文字が古い，貼付されている裂にまだ藍で染めたと思われる木綿縞などが含まれていることなどから，収蔵番号7060，収蔵番号7062以前のものと思われる．裂は粗く雑な感じのものが多く，貼付の仕方も丁寧ではない．
時代：明治

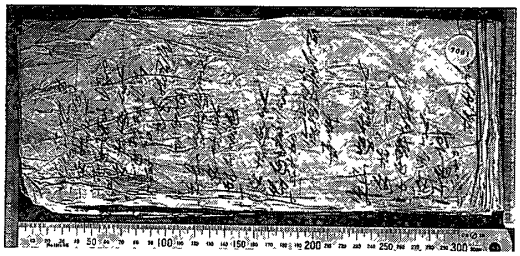
図8　収蔵番号7061の表紙

⑩資料館収蔵番号7062
大きさ：縦135mm×横385mm
体裁：和紙の右側をこよりで綴じている．
ページ数：16ページ＋表紙
裂数：177裂
表紙書付：なし
特徴：反古にいろいろな墨書が残されている．書かれている文字が収蔵番号7060と同一であり，「出納帳」の墨書，品名，日付なども同じように表記されている．貼付の裂も収蔵番号7060と同じような特徴を持ち，先述のように，貼付されている裂の中に収蔵番号7060と全く同じ柄のものがいくつも見られる．絣のみ，唐桟風の裂のみが貼付してあるページがあることなどについても同

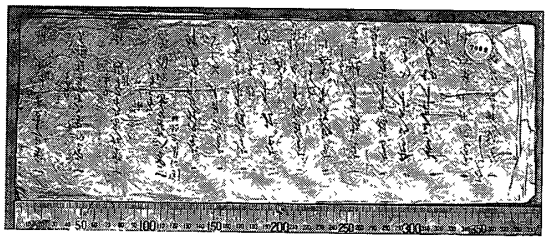
図9　収蔵番号7062の表紙

様である．
時代：明治後期

以上，これら10冊の中には「備后国」「兵庫県」など，当資料館の所在地である美濃地方以外の地域名が見られることから，他地域から収集した縞帳が含まれていること，また制作年代については，江戸，明治，大正という各時代のものが混在していることなどがわかった．特に，濃い藍染め，化学染料によると思われる鮮やかな色糸の使用，糸の細番手化，絹糸の使用など，明治期の木綿縞の特徴が見られる縞帳が多く保存されていることが確認でき，この手織木綿縞の隆盛期でありまた末期ともいえる明治時代の染織，紡績の様子を調査研究するための貴重な資料の存在を明らかにすることができたと考える．

2．資料館収蔵番号7058の縞帳について

調査した10冊の縞帳の内，江戸期の特徴を備えている資料館収蔵番号7058と明治期のものと思われる収蔵番号7057の2冊について，これまで行なってきた筆者らの調査方法に則り，すべての貼付裂に対して密度などの詳細な分析と記録を行なった．今回はこの内，収蔵番号7058から得られた集計結果について報告する．当縞帳には表紙に年号の書付が見られるため，貼付裂の分析結果をこれまでのデーター[2, 3]と比較することで江戸期の木綿縞についての今後の研究に必要な情報を得られる可能性が高いと判断し，詳細な分析調査を行なうこととした．

(1) 収蔵番号7058縞帳の概要
大きさ：縦240mm×横135mm
体裁：和紙の上部を和綴
ページ数：26ページ＋表紙
　　その内，裂が貼付されているのはp. 21～26の計6ページ
裂数：107裂
表紙書付：表題「志真手本」
　　年号「戊子」「五月」
　　所有者「婦く○○や」（○は不明）

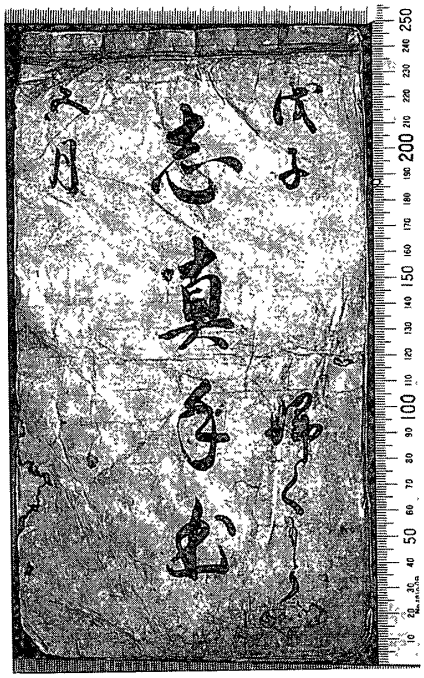

図10　収蔵番号7058の表紙

(2) 密度について
a．経糸密度
経糸密度は，20本/cmが38裂（35.5％）で最も出現率が高く，次いで19本/cmが28裂（26.2％），18本/cmが11裂（10.3％）となっている．これら18～20本/cmを併せると77裂（72％）となる．最高密度は28本/cm，最低密度11本/cmであった（表1）．このように密度が比較的低くなっている要因は使用されている糸が太いためで，布目は粗くなく，いずれも適度に詰まった布目になっている．縞帳に貼付されている裂はすべて実用が目的のものであり，晴れ着，普段着，ふとん地という織物の使用目的により糸の質や密度を変えることがあったといえる．
b．緯糸密度

表1　収蔵番号7058の経糸密度

本/cm	これ以下	16本	17本	18本	19本	20本	21本	22本	23本	24本	25本	26本	27本	28本	計
裂数	1	2	2	11	28	38	8	6	3	3	0	3	1	1	107
%	0 9%	1.9%	1.9%	10.3%	26.2%	35 5%	7 5%	5 6%	2.8%	2 8%	0.0%	2 8%	0.9%	0.9%	100.0%

表2　収蔵番号7058の緯糸密度

本/cm	13本	14本	15本	16本	17本	18本	19本	20本	21本	22本	23本	24本	計
裂数	7	1	10	16	13	20	12	11	3	6	1	7	107
%	6.5%	0.9%	9 3%	15.0%	12.1%	18.7%	11.2%	10 3%	2.8%	5.6%	0 9%	6.5%	100 0%

表3　収蔵番号7058の地合集計表

緯＼経	これ以下	16本	17本	18本	19本	20本	21本	22本	23本	24本	25本	26本	27本	28本
13本				2	2	3								
14本						1								
15本			2		4	3	1							
16本		1		4	4	7								
17本				1	7	3	1	1						
18本	1			2	6	6	2			1		2		
19本					2	5	2	2		1				
20本					1	6	2	1	1					
21本				1	1	1								
22本		1			1			2		1			1	
23本									1					
24本				1		3			1			1		1

緯糸密度は，18本/cmの20裂（18.7％）を最高に，16本/cmが16裂（15.0％），17本/cmが13裂（12.1％）と，ほぼ15～20本/cmの間に分散して分布しており，中心となる密度は顕著には現れていない（表2）．最高密度は24本/cm，最低密度は13本/cmであった．

c．地合

経糸と緯糸の密度の関係を示す地合については，緯糸密度より経糸密度が高い経地合のものが81裂（75.7％）を占め，緯地合は12裂（11.2％），経・緯が同密度のものは14裂（13.1％）であった．中でも経20本/cm×緯16本/cm，経19本/cm×緯17本/cm，経20本/cm×緯18本/cmという組み合わせのものが多かった（表3）．

d．密度についての考察

経糸密度は技術的な理由からか，古いものほど糸も太く密度も低い．密度が18～20本/cmの比較的密度の低いものが江戸後期の縞帳に多く見られる．そして時代が下るに従って使用されている手紡糸も次第に細くなり，また絹糸の入った糸入りの増加，細く均一な紡績糸が使用されるようになるなど，20～22本/cm，22～24本/cm といった高い密度の織物が多く織られるようになる．これらの時代の経過に伴う密度の変化については現在まで筆者らが行なってき

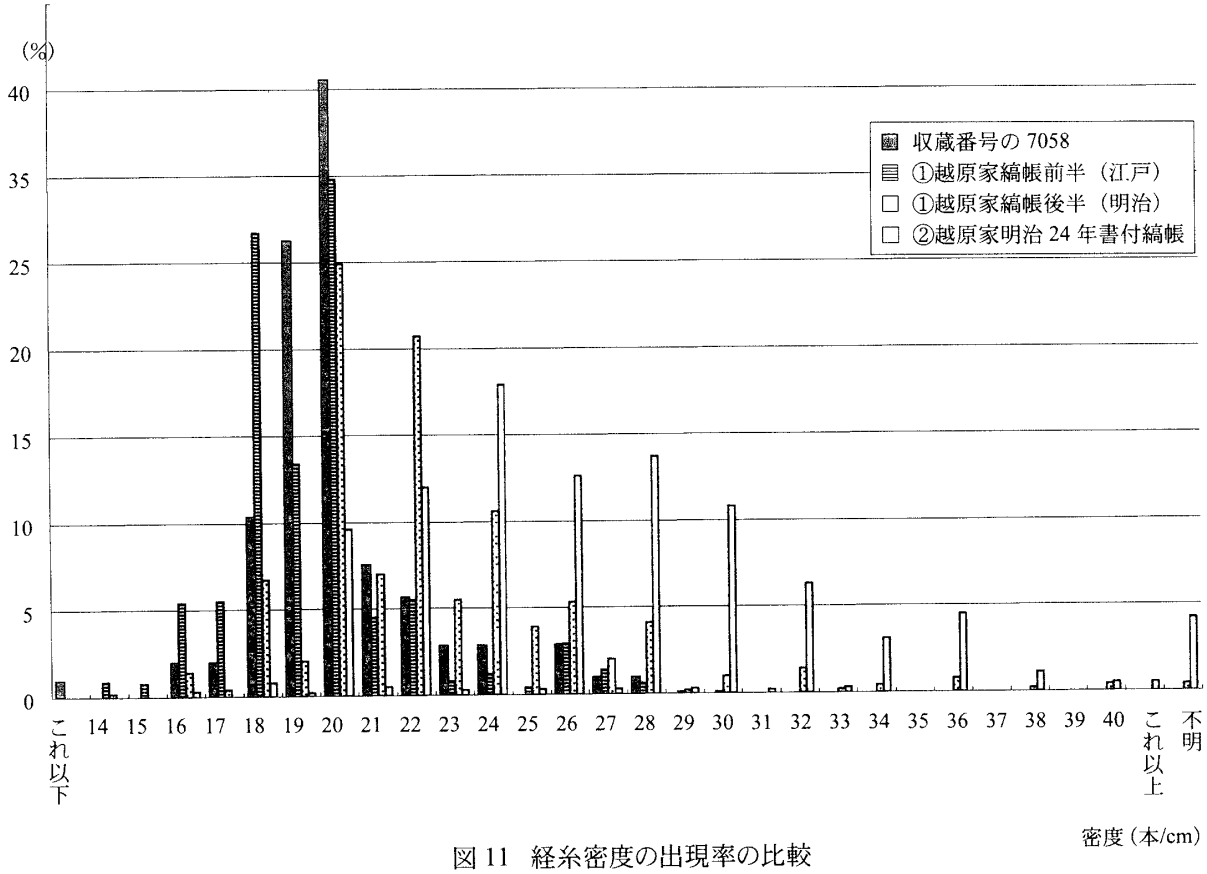

図 11　経糸密度の出現率の比較

た他の縞帳貼付裂の分析結果からも明らかになってきている．江戸から明治 21 年頃という長期間の自家用木綿縞裂が貼付され，経糸密度の変化の様子を見ることができる岐阜県加茂郡東白川村越原家に伝わる 2 冊の縞帳[1～3]と今回の縞帳の密度調査結果を比較したのが図 11，図 12 である．経糸密度の分布は 20 本/cm を境に時代が上るほど低密度の方に傾く傾向があり，この比較からは当縞帳の密度分布が明治以前の江戸期の分布に近似していることがわかる．

緯糸密度の分布については，織りの技術の熟練度，織り手のくせ，使用する糸の形状などの種々の条件によって緯糸の打ち込み本数にばらつきが生じるため，経糸密度のようなはっきりした傾向は見られないが，経糸密度と同様の傾向が現れる様子がわかる．

江戸から明治にかけては染織技術が大きく変化した時代であった．日本においてはそれまでの長い間，主に麻，藤などの植物繊維を利用していたが，室町時代に三河に渡ってきた木綿という素材が国内に根づいて以降，木綿が急速に国内全域で使用されるようになる．そしてこの木綿の普及により，木綿に対応した糸紡ぎ，染色，製織などの各技術が発達していき，明治前期から中期頃には機械紡績技術が海外より輸入されるようになり急速に機械化，産業化も進んでいった[4]．これらの近代化がもたらしたのは技術の変化のみにとどまらない．例えば，同じ幅の織物を織るにしても細い紡績糸が使用されるようになることで布が薄くなるという質の変化が起こり，経糸の総本数の増加や化学染料の使用によって，より細かく多色を使用した多様な縞割が可能になるなどのデザイン面の変化も引き起こす．そしてこれらの布の質やデザインの変化がひいてはその布を利用する服飾などの文化面にも影響をもたらすこととなるのである．

縞帳には，密度調査の結果にも見られるような当時の移りゆく時代の軌跡が残されており，種々の記録を裏付ける貴重な資料であることがわかる．

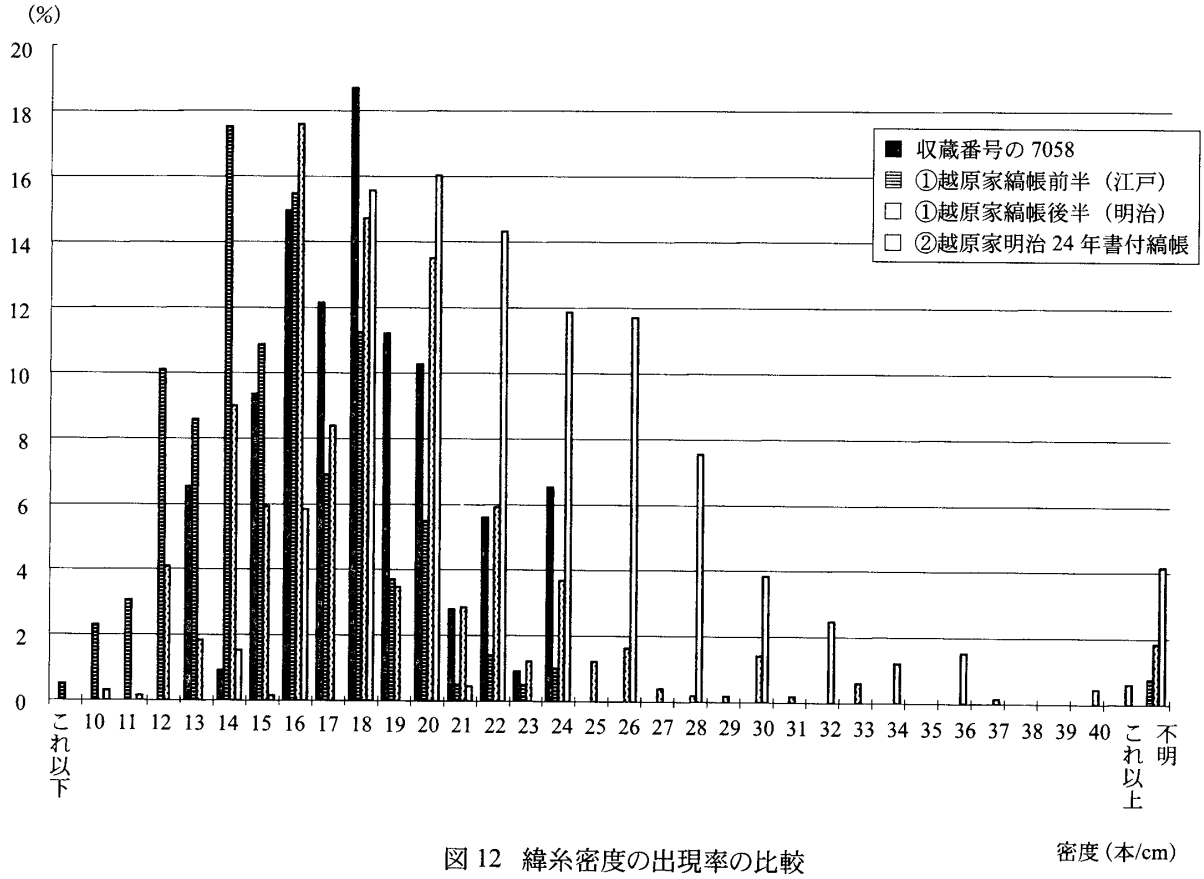

図 12　緯糸密度の出現率の比較

(3) 使用されている糸について

使用されている糸については素材と撚りの方向について分析した．糸の特殊なものとしては絣糸の使用，強撚糸の使用などが見られた．

a．素材

素材については，経糸・緯糸とも木綿のみの裂が 97 裂（90.7 %）と多く，絹糸の入った糸入り木綿はわずか 10 裂（9.3 %）にすぎなかった．明治期の縞帳に見られる絹のみの布も今回の縞帳には貼付されていなかった．糸入り木綿とは，木綿縞の縞割の中にほんの数本だけ絹糸や木綿と絹を撚り合わせた糸を入れて織った織物であり，絹の生産が増え比較的一般の間でも絹を使えるようになってきた頃に，絹へのあこがれと絹の使用を規制する当時の奢侈禁止令との間で工夫されてできたと考えられるものである．

また使用されている木綿糸には，現在の木綿糸に比べて毛羽が多いという特徴が見られる．これは当時日本で栽培されていた繊維が太く短い和綿を材料として使っていたからである．繊維が細く長い木綿で紡いだ場合には毛羽が比較的少なく細い光沢のある糸になるなど，材料である木綿の繊維の長さや太さは糸の風合いに大きく関与している．現在では機械紡績に適さない短繊維の木綿は脱脂綿やふとん綿といった‘わた’として用途以外にはあまり使用されていないようであるが，空気を含みふっくらとした弾力がある手織木綿縞の持つ風合いの良さはこの材料に負うところが大きい．

b．撚り

使用されている糸が機械紡績糸であるか，手紡糸であるかの指標となる糸の撚りの調査をランダムに抽出したいくつかの裂について行なった．経糸，緯糸それぞれについて調べた結果，

全ての糸がS撚りの単糸であることが確認できた．撚りの方向と手紡糸，機械紡績糸との関係については，和式の糸車を使って糸を紡ぐ場合には糸車の構造と常識的な紡ぐ動作からは必ずS撚りの糸ができるためS撚りの場合は手紡糸，一方Z撚りの場合は機械紡績糸と一般的には判断されてきた．しかし機械紡績の場合に「明治10年以前は，糸への規格が無い時代であったため，Z撚りと限らない」[5]という記述もあるため，その頃にはZ撚りのみでなくS撚りの紡績糸もあった可能性がある．このことから撚りの方向だけではその判断は難しいように思われるが，実際には紡績糸の場合，先述のように外国から輸入された繊維長の長い木綿を使用しているため糸に光沢があり，20番手程度で太さが一定しているという特徴が見られるため，糸の特徴と撚りの方向を調べることでほぼ判断が可能である．今回の分析では全ての糸がS撚りであり，紡績糸の特徴を持つ糸も見られなかったため，当縞帳は紡績糸が普及する以前の，手紡糸のみが使用されていた時代のものであると考えられる．

(4) デザインについて

縞帳に貼付されている裂のデザインは，ほぼすべて経縞と格子であるが，特殊なものとして無地の裂が2裂，型染めの裂が4裂が見られた．型染めの内2裂は縞柄であったが，残りの2裂は単純な柄物であった．型染めはいずれも無地の布に紺または黒の染料一色で染められている．なお，これらはすべて同じページにまとめて貼付されていた．

a．縞・格子

まず縞と格子の割合については，縞が88裂（82.2％），格子が15裂（14.0％）であった（表4）．この縞が8割前後という割合は，手織木綿縞の縞帳ではごく一般的な割合である．これまでの筆者らの調査で見られた地域や家の事情により縞と格子の比率が大きく偏る特殊なものとしては，江戸へ縞木綿を送っていた松阪の木綿縞帳（安成5年）で当時の江戸で経縞が好まれていた様子を示し，縞の割合が圧倒的に多い例や，三河で代々にわたり続いてきた薬局の三原屋に残る江戸から明治の縞帳で格子が44％という高い割合で見られた例などが挙げられる[6]．この三原屋の縞帳には家族の衣料や使用人の御仕着用の織物を貼付していたとされており，当家で身近な人々の日常着やふとん地などに格子がよく使われた様子を知ることができる．

b．対称・非対称

縞割の構成については，対称のものが82裂（76.6％），非対称のものが15裂（14.0％）と対称の裂が多かった．この対称・非対称の比率については，前稿[3]でも記したとおり古いものほど対称のものが多く，時代が下るに従って非対称のものが増える傾向がある．密度調査の項で比較した越原の縞帳では，最も古い江戸期のもので対称が65.1％，非対称が31.9％となっており，今回の縞帳の裂の方が対称のものが多い．

c．配色

配色については，3色配色が最も多く55裂（51.4％），次いで2色配色が41裂（38.4％）となっており，この2色，3色配色だけで90.2％を占める．最も多色配色のもので5色配色の裂

表4　収蔵番号7058のデザイン集計表

	デザイン			構成			配色							総裂数
	縞	格子	その他	対称	非対称	その他	1色	2色	3色	4色	5色	6色	その他	
裂数	88	15	4	82	15	10	2	42	54	8	1	0	0	107
%	82 2%	14 0%	3 7%	76.6%	14 0%	9 3%	1 9%	39 3%	50 5%	7 5%	0 9%	0.0%	0 0%	100 0%

が1裂のみ見られた．

各配色毎に使用されている色の組合わせを見てみると，2色配色では紺＋茶が14裂（34.2％），紺系のみが13裂（31.7％），紺＋白が13裂（31.7％），茶＋白が1裂（2.4％）であった．3色配色では紺系＋茶が32裂（58.2％）と多く，次いで紺系＋白が12裂（21.8％），紺＋茶＋白が7裂（12.7％）であった．紺系とは藍染めによる紺，青，浅葱などの色の中から2色を使用していることを示す．当縞帳では藍染めによる紺，青，浅葱などを主調色として白や茶をアクセントカラーのように扱った縞割が多く，配色数，使用色数ともに少ない素朴な裂が多い．これらの結果から，当時一般的には藍染めによる青系の色に白や茶を加えた程度の配色で縞割のデザインを工夫し，多様な縞柄を生み出していたことがわかる．藍染めをした布にはまむしや虫が嫌う効果があり，また汚れが目立ちにくい，木綿を丈夫にするなどの理由から野良着に適しているといわれており，当時の日常着は藍染めを主とした木綿縞が一般的であった．筆者らのこれまでの研究の中でも，縞帳に貼付されている縞裂の総面積の8割以上が藍染めによる色であったという調査結果がある[2]．

(5) 書付について

この縞帳の表紙には「志真手本」「戊子」「五月」「婦く○○や」（○は不明）などの書付があり，貼付されている裂の年代が考察できる貴重な資料である．

まず表題として書かれている「志真手本」の文字は，この冊子がまさに縞の見本帳であったことを示すものである．“志真”の字は“しま”という読みの当て字である．現在，二種以上の色糸を使って織物の経（たて）または緯（よこ），あるいは経緯に種々の筋をあらわしたものやその縞織物の筋に似た模様のことを“縞”の字で表しているが，“しま”という呼称が使われるようになったのも比較的新しく，縞木綿が南蛮船によって輸入されるようになってからと言われている．当初，南の島から運ばれてきた「島渡りの布」という意味で“島（嶋）物”と称されるようになり，やがて“しま”という呼称が使われるようになったというのが通説となっている[7]．それ以前は“筋（すじ）”とか“間道”などと呼ばれていたようである．他の縞帳の表紙などに書かれている“しま”の当て字には，当縞帳の“志真”の他に“島”“嶋”“嶌”などの漢字が見られる．“縞”という漢字についても本来の意味では精練した白い絹を意味するものであり，現在の縞の意味で“縞”という漢字を充てた縞帳は明治以降に多く見られる．

次に「戊子」「五月」の年号については，表紙の様子から縞帳として帳面を準備した時か，または縞帳が完成した時を表していると考えられる．江戸中期から明治中期で「戊子」に当たる年は，明和5年（1768年），文政11年（1828年），明治21年（1888年）である．裂の調査結果などからは江戸末期の文政11年と考えるのが妥当であると思われた．しかし，p. 1～20までの裂の貼られていないページに見られる何重にも重ねられた落書きのような中に「天保13年」という墨書が見られるため（図13），この墨書が書かれた反古を台紙として使ったのであれば，当縞帳の制作年代は天保13年（1842年）以後の「戊子」の明治21年にまで下ることになる．明治というのは裂の調査結果からは考えにくいが，「天保13年」の墨書が後から書き加えられた様子もないため熟考を要された．そこで台紙となって

図13 「天保13年の墨書」

いる反古をよく調べ直すうちに，一文字の大きさが8～10cmという大きな楷書体で書かれた「茶」と「宗」の文字が途中で切られていることに，この縞帳の台紙の制作方法を知る手がかりがあることに気が付いた（図14）．つまりこの縞帳の台紙は，何らかの用途で使っていた大きな紙を現在の縞帳の大きさに切って綴じ合わせたものであり，表題なども綴じ合わせた時に書かれた可能性が高いことがわかったのである．図14にも見られるように，途中で切れている大きな文字以外の多くの墨書は帳面の大きさにあわせて書かれているため製本の後に書かれたものであり，裂も同様に表紙の「戊子」の年以降に貼付されたものとするのが自然である．当縞帳が天保13年（1842年）以前の「戊子」に当たる年に製本されものであることと，木綿縞の貼付された自家用の縞帳であることから，表紙の「戊子」は明和5年（1768年）か文政11年（1828年）のどちらかと考えられるが，明和5年と墨書の天保13年とでは72年間もの開きあるため，裂の調査結果とも一致する文政11年（1828年）とするのが妥当であり，よってこの縞帳は江戸後期頃の裂が貼付されているものであることがわかった．

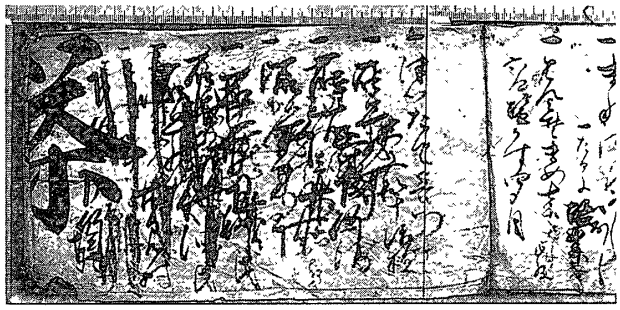

図14「茶」の墨書

最後に制作者名と思われる「婦く○○や」の墨書については，制作された地域を調べる上で重要な手がかりとなる記述と思われたが、今回は裏付けとなる文献等の資料が見つからなかったため、制作者、地域ともに特定に至らなかった．

以上，書付の調査からは，江戸後期には“しま”の当て字に“志真”という文字も使っていたこと，また縞帳の製本年が文政11年（1828年）であり，これ以降最後のページから前に向かって縞裂を貼付していった縞帳であることがわかった．

要　　約

今回は羽島市歴史民俗資料館所蔵の10冊の縞帳についての調査とその中の収蔵番号7058の縞帳についての分析結果について報告した．

まず資料館の縞帳調査からは，希少な縞帳の概要を10冊分も得ることができ，その中には年号や地名の墨書が残されているものや互いに関連のありそうな興味深い縞帳も含まれていることが確認でき有意義であった．次に収蔵番号7058の分析調査では，反古の墨書から製本された年が文政11年（1828年）であり，このことから江戸後期の自家用木綿縞には，密度が低い，木綿のみの裂が多い，縞の構成が対称のものが多い，配色数が少なく素朴な裂が多いなどの特徴が見られることが確認できた．

以上が今回の調査結果の概要であるが，同じ事の繰り返しのように思える縞帳調査から得たデータの積み重ねにより，書付がなくとも密度などの比較からおおよその制作年代を推測できるようになることがわかってきた．文字で残されていない文化を探っていくためには，このような活動が重要であるといえる．今後はこのような調査により，各地域の地理及び生活条件と木綿縞のデザインなどとの関連を見出していくことが課題となるであろう．

謝　　辞

本研究にあたり，羽島市歴史民族資料館の館長佐藤彰紘氏をはじめ，資料館職員各位，羽島地区の織物の歴史等のお話をいただきました元館長鈴木正太郎氏，反古の文字解読や旧家の情報をくださいました遠山佳治先生ほか，ご協力いただきました皆様に謝辞を申し上げます．

文　　献

1) 河村瑞江，山田真由美:木綿縞の染織文化―越原家の縞帳分析から（1）―，名古屋女子大学紀要 家政・自然編，39，1～12（1993）
2) 河村瑞江，南谷真由美，安井麻美：木綿縞の染織文化第二報－越原家の縞帳分析から（2）－，名古屋女子大学紀要 家政・自然編，40，1～14（1994）
3) 河村瑞江，山本麻美：木綿縞に関する研究報－越原家の縞帳2冊め調査を中心として－，名古屋女子大学紀要 家政・自然編，43，31～44（1997）
4) 角山幸洋：日本染織発達史，154～167，168～171，223～236，三一書房（1965）
5) 信夫清三郎：近代日本産業史序説，62，日本評論社（1942）
6) 河村瑞江，松田ほなみ：木綿織機と木綿縞，三河湾をめぐる海村地域の生活文化，273～318，名古屋女子大学生活科学研究所（1987）
7) 西村充孝：縞・唐桟，182～183，泰流社